

## 枕冊子本文語彙考証

「のあひたる・にあひたる・もあはなむ」「みそひめのぬり

たる」「わろくもあらず・にるべくだにあらず」「さまこそ

あらめ・やうこそはあらめ」「ひきもの・ひくもの」

田中重太郎

「校本枕冊子」の刊行によつて、清少納言枕冊子の異本異文についての調査は、それで一往用が足りるやうになつた。また、三卷本系統本文を底本とする枕冊子のテキストや本文注釈がつぎつぎと公にせられて、春曙抄本文によるものがきはめて少くなつた。いふまでもなく枕冊子の本文としてもつとも信憑すべきものは、三卷本か能因本かである。そのどちらが善本であるかは、一概にいへないが、すくなくとも、現存本をもととしてそこにみえる箇箇の本文語句を中心にして考へるとき、どうしても三卷本がよいと思はれるのである。そして、鎌倉時代の書写にかかり、その後、後人の手の加はつてゐない前田家本もこの冊子最古の写本として参考になるであらう。ただし、枕冊子といふ作品を考へ、現存伝本以前のもの考へるとき、能因所持本系統本のよきがわかつて

来る。わたくしが校本枕冊子の底本に伝能因本系統の写本を採ったのはこの意味においてである。今後はこの二系統本を中心とし、これに前田家本・堺本などの異本を参考にすることによって、枕冊子の本文研究、内容研究が進められなければならないであらう。なほ、ことわるまでもなく、能因本は決して春曙抄本文で代表せられるものではない。それはどこまでも別に考へねばならないのである。

ここに掲げる小稿は、わたくしが「校本枕冊子」の編纂を進めるをりをりに書きとどめたおぼえがき、存疑の類である。春曙抄本文のほとんど行はれてゐない現在、いままら発表の必要もないものであるが、三巻本が善本であると主張するについて、そのときそのとき部分的に考へたことをふりかへるのも参考になるし、またこれらについて他に発表せられたものもないので、あへてお目にかけることにした。説くところ新見に乏しい、十数年以前の稿を出して、わが怠惰を責める気持が強いが、二十年に近いわたくしのまづしい枕冊子語彙本文探究行脚も、いづれままとめて一書にできる日が来るであらう。

(昭和三四・九・一三)

一 のあひたる・にあひたる・もあはなむ

大言海 第三巻 の部「の」(辞) 助詞の条に

(三) に、ノ意ヲ示スモノ。古今集、二、春、下「志賀ノ山越ニ、女の多ク遇ヘリケルニ」赤染衛門集「同  
シ道ニ、恥カシゲナル男の行キアヒタリシカバ」(七六三頁)

と説かれてゐる格助詞「の」の用法は、辞書類では大辞典に右と同例をあげ、同様の説明ある以外大日本国語辞

典・明解古語辞典にもなく、通常の文法書にも説かれてゐない特殊な用法であるが、ここに枕冊子の二例を追補してかうした中古語法の一を簡単に説いておきたい。

例の、伊勢物語 東下りの条に

ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。うつ宇津の山にいたりて、わがいらむとする道はいとく暗らうほそきに、つたか萬づらはしげりても心ぼそく、すずるなるめを目みると思ふに、修行者あひたり。「かかる道にはいかでおはする」といふに、見れば、見し人なりけり。……

と見える「修行者あひたり」については、通常

「○修行者あひたり 修行者が。逢つたは古格。に逢ふは新らしい。」(高崎正秀博士「伊勢物語新釈」四三頁)と説明せられてゐるが、この「修行者」が主格であるならば、ここに説く「体言プラスのプラスあふ」形式と用じ用法になるのである。

やや時代は下るが、つれづれ草第八十七段「下部に酒飲まする事は」の段に

木幡こはたの程にて奈良法師の兵士あまたぐしてあひたるに

といふところがあり、この「奈良法師の……あひたるに」もこの語法になるであらう。

この例について、つれづれ草の諸註中、最もくはしく説かれたのは故橋純一先生である。即ち、左の如く注せられてゐるが、傾聴すべき御意見であらう。

奈良法師の……あひたるに 古くは、こちらが、誰かに偶然出会ふ場合、先方を主語にしていふ。「何

々にあふ」と言へば、こちらが意識的に先方に面会し、又は対談する意で、前段にも「坊主にあひて」とあつたのがそれである。近世では偶然会ふのも、意識的に会ふのも、表現上区別がなくなり、共にこちらを主語として「何々にあふ」といふに至つた。ここでは「奈良法師の」が「あひたるに」の主語、「兵士」は「ぐして」の客語で、「兵士を」と「を」を補つて見るとわかりよい。この表現の例九四段「常盤井相国出仕し給ひけるに、勅書をもちたる北面あひ奉りて。」一〇六段「馬に乗りたる女の行きあひたりけるが」此他例が多いが、ここに適切な一例を挙げる。沙石集二上、地藏菩薩種々利益事「此女房、……烏丸を下りにぞ行きける。臘月夜に見れば、入道の馬に乗て、供の者四五人計具してゆきあひにけり」（藤井博士校本、五五・一一）〔正註つれぐ草通釈 中巻 二二二—二二三頁〕

なほ、橋先生はこの語法について、右の著に先立つて、「国語解釈」第二巻、昭和十二年二月号、教材解釈課題答解発表（第十一回）に二頁にわたつて詳説してをられるが、ほぼ同様の所説であるから、右にあげてない用例ならびに参考すべきところを左に引いておく。

昔は、偶然の邂逅と、有意の面会とを区別して表現したのである。（中略）此点昔の方が表現法が精細であつたわけで、この場合に関しては、表現法の退化と言ひ得る。なぜ昔は、偶然の邂逅をかく表現したかを考へて見るに、その場合、当面の主人公その人に、「あふ」といふことに関して何等意志の発動がないのに、彼方から突然出現して出会したと考へ得られるから、その相手方に発動的意志を仮想して、「あふ」といふ動作に関する限り、先方を主語の位置に据ゑていふのであらう。この場合此方が補語になるわけだが、その補語は通常省略せられるのが常である。（中略）この表現は、鎌倉以後までも続いたのが、国語の一大

変換期たる室町中期に滅びたのだらうと思ふ。(六四―六五頁)

(発心集一) 昔、釈迦如来舎衛国におはしまし、時、阿難尊者と申し御弟子を具し給ひて城の辺を出で給ふに、あやしげなりける翁・女二人具して道にて逢ひたてまつる。(舎衛国老翁不顯三宿善事)

(同 五) 人に問ひつゝ、辿る／＼行きけるを、みづのみといふ所にて、檀那僧都覺運と云ふ人行合で、(唐房法橋発心ノ事)

(太平記、卷二「阿新丸殿事」)(阿新は)……そことも知らず行くほどに、……年老いたる山伏一人行き逢ひたり。

さて、前置が長くなつたが、枕冊子の例について述べてみる。枕冊子の例をまづあげると、その一は春曙抄巻三にげなきもの(池田亀鑑博士校訂 岩波文庫所収本 上巻 四十三段)の一節

月のいとあかきに、屋形やかたなき車いぢのりたるにあひたる。又、さる車にあめ牛うしかけたる。(一六九頁)

である。もつとも、右の春曙抄本文や盤斎抄本文その他現行諸註の多くのものの本文では「車に」とあつて「車の」となつてゐないのであるが、それは伝能因所持本系統本に於いては、現存最古の三条西家旧蔵本に

月のいとあかきに屋かたなき車にあめうしかけたる(上巻 四十二ウ3―4)

とあり、以下十行・十二行・十三行各古活字本・慶安刊本・旁註に至るまで「車にあひたる又さる」の一句を脱落させてゐるために春曙抄の如き本文——それは三巻本その他の本文を採つて作爲したものであるらしい——となつたのである。

三卷本系統（第二類本）本文には、このところ

月のあかきにやかたなき車のあひたる 又さる車にあめうしかけたる（刈谷図書館蔵本 上巻 五十才）  
とあつて、現存諸本に全然異同がない。（ただし、第一類本はこのあたり全部を闕いてゐる）

前田本には

月のいとあかきにやかたなきくるまのありきたる又さるくるまにあめうしかけてあらくやる（めでたきもの）  
卷 六十才 活字本 四七六頁）

と見え、塚本系統諸本には

月のあかきにむなし（鈴鹿三七氏蔵本「むなし」車と（京都大学蔵本・群書類従所収後光嚴院宸翰本「など」）  
いふ物のありく

などとあつて、すこし本文を異にしてゐて参考にし難い。

しかし、この四系統の本文を通覧して、三卷本本文に最原始形態をもとめ、他の諸系統本文は「の」の用法を  
の他を誤推した誤脱本文とみることはゆるされないのであらうか。すくなくとも、わたくしは、これら四系統諸本  
を枕冊子全巻にわたつて校合してその性質をたしかめた後もさう考へてさしつかへないと思ふが、ともかくも三  
卷本第一類本に闕けてゐる段であり、なほ積極的な資料を待つ次第である。

次にいま一つ、類似の例を掲げてみよう。

春曙抄 卷五 五月の御精進まうしの程ほどの段（岩波文庫 中巻 八十七段）中に

……「人もあはなむ」と思おもふに、さらに、あやしき法師、あやしのいふかひなき物のみたまさかに見ゆる、いとくちをし。……(中巻 四二頁)

との一節があるが、右の「人のあはなむ」の用法はまさにそれである。

動詞の未然形につづく終助詞「なむ」がいはゆる詠嘆の意をあらはし、「……てほしい」「……てくれ」と口訳せられる語であることはいふまでもないが、ここの「人もあはなむ」は「人にあはなむ」「人にもあはなむ」と同義ではない。春曙抄に

此のうの花車を見せたき心也 (四二頁)

と傍註してある意にまづ相違はないけれども、直訳すれば「人もあつてほしい」である。それがいまの「人が見てくれればよいのに」「人にあへばよいのに」の意であることは勿論である。そして、これが、金子元臣氏の評釈(増訂版)に

○人もあはなむと思ふに 途中にて、誰かよき人の行逢ひくれよと思ふにと也。これは拾遺集、今昔物語に出でたる、屏風の絵に山路に女車ある所をよめる伊勢の歌「ちりちらず聞かまほしきを故郷の花見て帰る人もあはなむ」とある結句を引用せるなり。(五〇六一五〇七頁)

とある伊勢の歌に拠るものであるなら、そこにも一例を見出すこととなるであらう。ただし、この「ちりちらず」の歌は夙に武藤元信翁の通釈(上 三六四頁)に註せられてゐる。

なお、春曙抄 説経師はかほよき の段中に

久しくあはざりける人などのまうであひたるめづらしがりて……

もこの語法類似の例であらう。このところは、三卷本「人のまうであひたる」前田本・塚本「人なとまいりあひたれば」とある。  
(昭和二一・四・一六夜)

## 【追記】

右に掲げた例の中「人もあはなむ」の例については、武藤元信翁に次のやうなお考のあることを知つた。追記して御参考にしたい。  
(昭和二一・五・二六夜)

○七二 人もあはなん(三六一) 古事記に「遇麗美人爾」とあるを、鈴屋翁の伝にカホヨキヲトメノアヘルニとよませ「美人に」と云ときは、此方より美人に遇なり。美人遇また美人の遇など云ときは、其美人の方より遇なり」とて万葉集(十三)の「うらぶれて妻はあへりと人ぞつげける」といふを始め、多く歌文を引きたる中に、拾遺の此歌も引けり。是等は文章の構造によるべき事にて、てにをはにのみよりがたし。かく美人を主語と見るときは、補語あるべき処にて、其補語は邇々芸能命也。其補語を省けるものと見るべし。されば美人の邇々芸能命にあへるにと也、この「人もあはなん」といへるは、拾遺の歌を考ふるに、帰ってくる人の、彼方より来て我に遇ふ意なれば、我といふ補語の省かれたるものとみるべし。(清少納言枕草紙別記 第一 余釈 二二頁) なほ、武藤翁の引かれた古事記伝の説全文を次に引用しておく。

遇麗美人は、加本余伎袁登売能阿幣流爾と訓べし、是雅言の格なり、(近世にはかゝる処は、美人爾と云例なれども、雅言は然らず、美人爾と云ときは、此方より美人に遇なり、美人之遇など云ときは、其美人の



方より遇なり、かゝれば爾てふ辞のあるとなきとは、此と彼との違ひあるを、いかなればか雅語には、凡て爾とは云ざる例なり、左にこれかれ挙るがごとし、万葉十三丁に、裏触而妻者會登人會告鶴、妻者と云も、妻之会なり、古今集〔春部〕端詞に、志賀の山越に女の多く遇りけるに、伊勢物語に、宇都の山に至りて云々、修行者遇たり、拾遺集又六帖〔伊勢の哥〕に、散散らず聞まほしきを故郷の花見て還る人も遇はなむ、〔人もと云も、人のあはなむなり、忠見集に、云々ゆく道に知たる人あひて、兼盛集に、旅人いくあひだに、ぬす人あひたり、赤染衛門集に、同じ道に恥かしげなる男のいきあひたりしかば云々、後の物ながら宇治拾遺物語にも、道に狐のあひたりけるを、又与佐の山に、白髪の武士一騎あひたりなど云、徒然草にすら、細道にて、馬に乗たる女の行遇けるがなど云り、其ころまでも、云さまを失はざりしなり、などあるを以て心得べし、凡て道などにして行遇たる事をば、皆如此云り、〔然るを近き世には、某に遇フと云ことになれるは、漢字よみよりうつれるものなるべし、漢文にては、遇ノ字、上に在て、返りてよむ故に、爾とよみならへるなり今此記などにも、遇の字を上置るは、漢文の格に依れるなり〕中巻輕島宮段大御哥に、許波多能美知邇、阿波志斯袁登売、下巻若桜宮段大御哥に、湊富佐邇邇、阿布夜袁登売、これらの遇も、袁登売の方より遇にて、同じ、〔袁登売に遇給ふと云意にはあらず。〕(増本居官長全集 第二八〇一―八〇二頁)

さらに塚本 上巻 ねたき物 の一節に左の如き一文が見えるが、「おとこくるまのあひたる」は、やはり「…のあひたる」の一例となるであらう。

ものへゆくみちにきよけなるおとこくるまのあひたるなどをたれそとみむなと思ほたとにふとすたれおろしてい

きちがひぬるこそねたけれ (高野博士本 乾 廿八才)

二 みそひめのぬりたる

春曙抄 百二十六段 とり所なきものの一節に、

御衣編糲のぬれたる。これいみじうわろき事いひたると、万の人憎むなる事とて、今止むべきにもあらず。……(中巻二二七頁)

といふところがあるが、この「御衣編糲のぬれたる」の一句についてすこし考へたい。

といつても、いまのわたくしにはこの難語句に対する明解がないのであるが、ただ「ぬれたる」の流布本文は現存信すべき諸本になく、したがつて「みそひめ」を従来の如く解釈しておいてよいかを疑つてみたいだけなのである。

「みそひめ」については、従来春曙抄の

○みそひめ——編糲、或説云、非米作粥之義也と和名にあり。衣にひめのりして張るは、こはくせんためなるにぬれてはとり所なかるべし。(二二七頁)

といふ説が一般に行はれて今日に至つてゐる。すなはち、明治の「通釈」(武藤元信翁)にも

○みそひめ みそは御衣なり。ひめは和名抄に編糲をよめり。箋釈に「又俗有比米粘、以此為粘」といへり。(四八二頁)

と見え、大正の代表註「評釈」（金子元臣氏）にも

○みそひめの云々 「みそ」は御衣、「ひめ」は和名抄に編綴とありて、今の姫糊のこと。姫糊に水が入つて濡れたるは、折角糊を付けて、切地を固くせんとする效なければ也。（増訂版 六八三頁）

となつてゐるのである。（因みにいふ、盤斎抄には「みそひめのぬれたるとは未考之」とあり、「或云糊をひめともいふなり御衣にひめ付しを雨などにぬれし心にやとり所なき物と云題の義成べし」とも註してゐる。また、旁註には「みぞ」の右に「御衣」とあるだけで別に註がない。）

しかし、この説は春曙抄にはゆる「衣にひめのりして張るは、こはくせんためなるにぬれてはとり所ない」のである。「ぬれては」だめだといふのである。そして、この場合「ぬれたる」はこの冊子本文批判の上から決して採るべき本文と思はれないのである。

みそひめのぬりたる

の「ぬり」を「ぬれ」につくる本文は盤斎抄・春曙抄・旁註以外には伝能因所持本中末流本たる慶安刊本にのみ「ぬれたる」と見えるだけで、他の現存伝能因所持本、三卷本・前田家本、すべて「ぬりたる」である。堺本にも「ぬりたり」または「ぬりたる」とあつて、決して「ぬれたる」とはなつてゐないのである。（ただし、高野辰之博士旧蔵本・長沢伴雄旧蔵本には「みそひめ」を「みそひつ」につくる。）

さて、「みそひめのぬりたる」とは如何なることであらうか。「これいみじうわろき事いひたると」（前田本「たりと」三卷本「わろき……たると」ナシ）よろづの人<sup>（一）</sup>がにくむといふことであるが「みそひめ」が判然としな

い。「ぬり」は塗りではあるまいか。思ひつきを左にしろして後考を俟たうと思ふ。

「みそひめ」は訂修大日本国語辞典に

みぞひめ 御衣姫（名）御衣に附くるひめ糊。枕七、とりどころなきもの「みぞひめの濡れたる」

とあり、大言海に

みぞひめ（名） 御衣編○ 衣ニツケタルひめのり。枕草子、七、第六十七段、とりどころなきもの「みぞ

ひめノヌレタル」

と見えてゐる。大辞典も大同小異の説明で引例は同じである。

もし「みそひめ」が堺本の或る本に見えるが如き「みそひつ」であつたら、それは「みぞびつ」（御衣櫃）となり、宇津保物語 国譲下などに見える語となり、「ぬりたる」を「塗りたる」とするのも通じ得ようが、それが「とりどころなきもの」であるゆゑんがはつきりしない。また堺本中の一二の本にのみあるこの本文を採ることは、他の有力諸本にすべて「みそひめ」とはつきりするされてゐることからも躊躇されるのである。

とりどころなきもの の最初には「かたちにくげに心あしき人」があり、その次に「みそひめのぬりたる」がある。人の「かたち」がみにくくあることがよくないのに、その上「心あしき」人であつたらとりどころがないといふのである。三巻本や伝能因所持本系統本文には見えないが、前田本には、この次に

くろゐのくしはらひ くろかねのけぬきものぬけぬ やきすゝり あとひの火はし

があつて「みそひめの……」がつづいてゐる。堺本も「あとひの火はし」がなく、他の句に小異あるが右のやう

な語句がやはりならんでゐる。

「くろろ」は黒蘭であらうが、それでつくつた櫛はらひ(刷子)がとりどころなのは、色が黒いので下品であるといふのか、あるいはそれに櫛にたまつた塵埃その他を払つても汚れが見えないからといふのであらうか、わたくしにはわからないことばである。「くろろがね(鉄)の毛抜」は感じのよくない安っぽいものである上に「物抜けぬ」ではしかたがないのであらう。「やきすゞり」(焼硯)もわからない。

しかし、これらの中、たださへわるところへもつて来てさらに何か条件のわるいことを述べたものがすくなくとも二つあるところから「みそひめ」といふものもともと「とりどころなきもの」であるところへ、それが「ぬりたる」ものなのでいよいよ「とりどころ」がないといつたのだとも考へられるが、「みそひめ」の正体が判明するまで、未だ何ともいひえないことである。

この語を考へ出して五年になるが、今日までその用例を発見し得ず、また解釈もできないままでゐる。大方の御高示を仰ぎたいものである。(昭和二・八・九朝)

この稿を書いて十三年余を経たが、まだよい考がない。その後の新注でとりあげるべきものを示すと、池田龜鑑博士の「全講枕草子」(上)では、「思うに『塗りたる』の意で、ものに塗りつけられたひめのりは、どのみち役に立たぬことをいうか」とあり、塩田良平博士の「枕草子評釈」には一往「濡れたる」の通説に従ひながら、『ぬ(怒)』と『ふ(婦)』の誤字ではないか。さすれば、糊の古くなつたの意」との新見を出された。卓見ではあるが、これを認めるとすれば、現存信ずべき諸本に見える「ぬりたる」をすべて「ふりたる」の誤字とみなけ

ればならない。岡一男博士の「精講」金子元臣氏の「通解」改訂版その他には特別の意見はない。

### 三 わろくもあらず・にるべくだにあらず

春曙抄 百四十八段 此の三月三十日 の段（これは、実は前段「宰相中将齊信」に含まれて一段となるべき段であるが）中、源中将が宰相中将と競争してゐたが、清少納言が

宰相中将の御上をいひ出でて、『末だ三十の期に及ばず』といふ詩を、異人に似ずをかしう誦し給ふなどいへば、「などか、それに劣らむ。勝りてこそせめ」とて詠むに、「更に悪くもあらず」と言へば、「佗しの事や。いかにあれがやうに誦せで」などの給ふ。（中巻 一七三―一七四頁）

といふところがあるが、右の「更に悪くもあらず」は三巻本に現存してゐる「にるへくたにあらず」に近く

さらににるべくもあらず

の誤であらうことを述べたい。

もつとも、「更に悪くもあらず」の本文は、夙に武藤元信翁の通釈に改められ、その本文を参考せられた永井一孝氏の新釈などに採用、関根正直博士の集註や現行枕冊子三巻本翻印本にはすべて「さらににるべくだにあらず」が採られてゐるのであるが、一方旧本文もまだ根強く行はれてゐる。すなはち、金子元臣氏の評釈（増訂版も）をはじめとして、一般に春曙抄その他を底本とした註釈書・文庫・叢書本・教科書類はほとんど「わろくも」の本文である。

これは、「にるべくだに」の本文を採用した註釈書その他に採用の理由を全然記していないことにもよるであらう。単に、「三巻本に拠つた」とか、「何本によつて改めた」とか述べてあるのでは、対等の異文と考へられ、その選択は自由と思はれるからである。

しかし、これはさうした性質の異文ではないのである。なるほど、「わろくも」の本文は現存伝能因所持本系統諸本にすべて有する本文である。(ただし、高野博士本には「わるくも」とある)が、「さらに……あらず」の語法から考へても「わろく」はおそらく「にるへく」からの誤写と考へられるのである。「わろ」は「にるへ」と草仮名に於いても紛れやすい。「わ」「王」の草字(「ろ」「呂」の草字)は「に」「爾」の草字(「る」「留」の草字)「へ」にはなほだ似通つてゐるのである。また「わ」と「に」ともきはめて誤まりやすい。「にるへく」が「わるへく」になり、「わるく」「わろく」などと改められたとも考へられよう。しかし、わたくしは前の考をとりたい。

「わろくも」の「も」が「たに」からの誤写であるか否かは疑問であるが、この助詞はその意に強弱の差こそあれ、いま考へなくとも「わろく」「にるへく」が一文になれば、この文意はさう誤まらないのである。

「さらにわろくもあらず」に対して、金子氏は

まるきり悪くもない。(評釈 七六三頁)

と口訳せられ、他の諸書もおほむねこれと同解であるが、「わろく」の語義から考へて「さらにわろくもあらず」は

さうよくないといふほどでもない。

と解せるであらう。

しかし、これが「さらににるべくも（だに）あらず」だつたらどうであらう。

とても似るといふところへさへも来てゐない。まったく似ても似つかない。

などの意となつて、次の「わびしの事や。……」に生きて来るのである。

なほ、末尾の「……誦ぜで」などは伝能因所持本中三条西家旧蔵本に「すんせてなりしなど」とあるが、他には本文異同なく、三巻本に「すんせん」と（「誦せん」と）とあるが、その方が自然であり、無難である。もと三巻本の如くあつたのではなからうか。（昭和二一・八・一七）

#### 四 さまこそあらめ・やうこそはあらめ

百四十九段 弘徽殿とは閑院の太政大臣の女御とぞ聞ゆる の段（これは百四十七段 「宰相中将齊信 宣方  
の中將と参り給へるに」の段に入るべきであるが、しばらく底本の段数に従つておく）の一節

「さるべき事もなきをほとほり出で給ふ。様こそあらめ」とて花やかに笑ふに……（中巻 一七七頁）

の「様こそあらめ」は、このあたり、春曙抄に

○さるべき事もなきを——清少の詞には、更に聞きとむる事もなきにうらみ給ふは、様子こそあるらめと也。

恨み腹立つをほとほりと云ふ也。（二七八頁）



とあるが、これは、金子元臣氏が

○さまこそあらめ それには何か仔細あらんと也。(増訂版「評釈」 七七二頁)

と述べてをられる意なのであらう。他の諸註もまた一般にさう解してゐるやうである。

しかし、もし「さまこそあらめ」が「(何か)理由・仔細・所以があるのであらう」の義であるとすれば、

さまこそあらめ

は

やうこそあらめ

とあつてほしいところである。理由・仔細・所以の義をあらはす名詞として「やう」の例は他にもよく見られるし、「見つつ、こちらの人の婿とり給ふもやうあらむ」(宇津保物語蔵開下)、「定めてやうあるらむ、射ることなかれ」(宇治拾遺物語七)などの例も国語辞典に示されてゐるが、名詞「さま」がさうした意味で用ゐられた例を知らないからである。そして、「さま」がもと「やう」であつたとし、それが途中「様」と真名書せられ、さらに「さま」と誤まつて読まれ、写されて来たものではなからうかと考へられるのである。

かうした考を最初に発表せられたのは関根正直博士であつたが、それより先、武藤元信翁もこれに触れてをられる。すなはち、その名著「通釈」にはなほ「ほとほりで給ふさまこそあらめ」とし、

○ほとほりで給ふ云々 ほとほりは神代紀に熱又は火熱をホトホリとよみ、作色又は愠色をオモホデリとよませたれば、顔の赤むまで怒るをいふ。さてこゝは、左京をかたらひ給へばこそ怒り給はめとの意を含めて

いへるなり。(通釈 五五九頁)

と註してをられたが、その遺著「清少納言枕草紙別記」に

◎一一四 ほとほりいで給ふさまこそあらめ(五五八) さま以下、古本に「やうこそはあらめとあり。さればほとほりいで給ふはおぼすやうこそあらめと也。源氏少女に「かくおきてきこえ給ふやうあらんとはおもふ給へながら」とあるもこの例也。(三三頁)

と追考してをられる。(同書凡例によれば、「◎の簽をつけたるは、出版後おひつぎの考也。この内希に通釈を訂正せしもあり」と見えてゐる。)しかし、前説をすつかり撤回せられたのかどうかははつきりしない。

次に、関根博士は「集註」の本文を「ほとほり出で給ふ、やうこそはあらめ」と改め、頭註に

やうこそは 千本による 諸本これも さまとあり。(四七二頁)  
と記し、

○やうこそは〔補〕流布本<sup>さ</sup>さまとあり。千蔭本、やうと訂したるはよし。是れも、元は様とかきたるを、訓みだがへし也。やうは様子<sup>の</sup>の意なり。俗言、何か仔細様子のある事ならむとなり。(四七二頁)  
と説かれた。

右の「別記に見える」古本とは三巻本のことであり、「集註」にいふ千蔭本の訂した原拠本も他の場合から推考して三巻本のことと思はれる。そして、現存三巻本文にはすべて

ほとをりいで給やうこそはあらめ

となつてゐるのである。

この段、前田本・塚本にはないが、一方伝能因所持本系統本に左の如く見える。

ほとをり出給やうこそあらめ 三条西家旧蔵本・十行古活字本

ほとをりいて給ふやうこそあらめ 高野辰之博士旧蔵本

ほとをり出給ふ様こそあらめ 十三行古活字本

ほとをり出給ふさまこそあらめ 慶安刊本・盤斎抄

ほとおりいて給ふさまこそあらめ 旁註

とあり、「やう」が「様」となり、それが「さま」になつた所以は明白になつてゐる。今日われわれがみる枕冊子の本文「さまこそあらめ」は実にかうして誤まられた経路をもつものであつた。

以上、例の小さな問題であるが、ここにおぼえがきしておきたい。(昭和二一・八・一九)

## 五 ひきもの・ひくもの

百八十二段

引きものは 琵琶。さうのこと。(中巻 三三三頁)

の本文について考へる。

引ものは の段はこれが全文であるが、「引ものは」は「ひきものは」とよむか、「ひくものは」とよむべきか

が、まづ問題となる。

従来の主な諸註をしらべると、

ひきものは 盤斎抄・通釈(武藤元信)・評釈(金子元臣氏)・評釈(内海弘蔵氏)・集註(関根正直博士)・全

釈(栗原武一郎氏)・口訳新註(小林栄子氏)

ひくものは 詳解(松平静氏)・新釈(永井一孝氏)

引物 は 春曙抄・旁註(引ものは)

といつたありさまで「ひきものは」が圧倒的である。そして、訂大日本国語辞典には

ひきーもの 弾物(名) 引きて鳴らす楽器。即ち、琴・琵琶・三味線の類。絃類(イトルキ)。絃器。宇津保俊蔭

「ひきものは、北の方さる上手におはすれど」枕九「ひきものは。琵琶、さうのこと」(第四卷 九五三頁)

と引かれてゐる。大辞典にも同様に引かれてゐる。

いふまでもなく「ひきものは」は複合の名詞であり、一単語であり、「ひくものは」「ひく」(弾)といふカ行四段活用動詞連体形と名詞「もの」との二単語である。したがつて、「思ひ人」と「思ふ人」と「死に人」と「死ぬる人」とが異なるやうに語感を別にする語句である。しかして、「ひきもの」といふ語は右のうつつほ物語(俊蔭卷)以外に源氏物語 松風・若菜上などに見えてゐて、それが一語として用ゐられてゐたことはまづたしかである。それには源氏物語胡蝶の卷その他に「ふきもの」(吹物・笛)の対語としてりつぱに用ゐられてゐるのである。したがつて、ここにわたくしは一般論としての「ひきもの」を考へてゐるのではない。ただ、枕冊子の一段

のまくらとしての本文を考へたいと思ふのである。

清少納言枕冊子の現存諸本をしらべると、伝能因所持本系統に於いては三条西家旧蔵本以下現存諸本すべて

引物は

とあつて、「ひき」か「ひく」かはつきりしないのであるが、既述の如く盤斎抄にはこれが「ひきものは」となつてゐる。

ところが、現存三巻本の本文は管見の及んだところ、すべての本に

ひく物は

とあり、前田家本には仮名で

ひくものは

と見えてゐるのである。

堺本には

ひき物は

とある。

かくして、これらの諸本にも既掲諸註と同じやうに「引物」「ひく物」「ひき物」の三つの表記が見られるのであるが、現在までの枕冊子本文研究の上からもつとも信ずべしとせられる三巻本に「ひく」とあり、さらにそれについて部分的に古いかたちを存してゐると考えられる前田家本にも「ひく」とあり、やや後の本文が相当混入

してゐると考へられる伝能因所持本系統本に見える「引物」も「ひくもの」とよみ得ることから、この語句は

ひくものは

とすべきではなからうか。枕冊子抜書本には、「ひくものは」「ひく物は」と見える。

なほ、このよみについて、内海弘藏氏は

○引きものは 引くものはとよませてゐる本もあるが、引きものであらう。(評釈 三五八頁)

といはれたが、右の理由で従ひ難い。

もつとも、この問題は、この段のつきに見える「笛は」の段が能因本にすべて「笛は」とあるが、三巻本には内閣文庫本に「ふき物は」とあるのを除いて、「ふゑは(笛は・ふえは)」とあり、前田家本に「ふくものは」とあり、堺本に「ふきものは」とあるのとあはせ考へるべきであらう。ことに三巻本第二類本に「ふゑ」の傍に「ふきものイ」と小書してゐるのは、堺本よりの影響と思はれ、共通点がみられるからである。さらに、次段の「見る物は」は、能因本に「見る物は」とある以外他の系統すべて「見物は」「見ものは」とあることをみると、一概に「ひくものは」と定められないかも知れない。なほ、後考をまつが、「ふるものは」(これはすべて「ふる……」である)の例もある。ただ「ひく」と「ふく」とは、どちらも音楽・楽器に関係にある点、あはせ考へるべきであらう。しかし、他の段との比較よりもこの段はこの段でともかくも考へるべきである。

つぎに、この段の本文であるが、春曙抄にみられる

琵琶。さうのこと。

の二つはもと「琵琶」であつたらしい。現存本でしらべてみると、伝能因所持本では、三条西家旧蔵本・各古活字本いづれにも

### 琵琶

だけしかなく、慶安刊本に至つて、「さうのこと」が加わり、以後盤齋抄・春曙抄・旁註にそれが加へられてゐるのである。

三巻本に於いては、いはゆる第一類諸本には「さうのこと」がなく、第二類本たる弥富破摩雄氏旧蔵本・古梓堂文庫本・内閣文庫本などに見えるが、他の諸本には見えない。

前田家本には「さうのこと」がない。堺本にはそれがある。

右の本文現象によつて、考へられることは、三巻本第二類本が第一類本文を底本として堺本本文を校訂したものとすの説（楠道隆氏所説）を思ふ時、「さうのこと」の本文は堺本編纂者または堺本源流本の編者によつておそらく書き加へられたものであり、それが三巻本第二類本におよんだのであらうと想像せられるのである。抜書本にも「さうのこと」がないのは、それを裏づけるものといへよう。

もつとも、堺本の源流本が清少納言みづからの略記本・草稿本であつたら問題は別であるが、わたくしはしばらく「さうのこと」は清女の筆でないと断言し、この段から削除しなければならぬと説きたいのである。

(昭和二一・八・二九)

(本学教授 国文学)